学術随想

「超越」ということ

●連載

薗田　稔

去る三月十六日の夜、東京の日本青年館で、西独コンスタンツ大学の社会学教授、トーマス・ルックマン氏の講演を半年ぶりで拝聴することができた。

来日中の同氏を東洋哲学研究所が招いて主催された特別講演会で、その演題は「現代西洋における宗教と社会構造」というものであった。半年ぶりというのは、昨年八月末に西独チュービンゲン大学で開催された国際宗教社会学会に参加して、やはり同氏の講筵に接したからである。

あご髭をたくわえたソクラテス風の思慮深そうな容貌で、時にユーモアを交えながら諄々と自説を展べる容子は、以前と変らぬ老成した学者ぶりである。しかし話の内容は、一般になじみの薄い現象学の立場からする現代宗教論でもあったので、有能な通訳嬢の奮闘にもかかわらず聴衆にどの程度の理解が得られたかは、いささか疑問であったように思う。

しかし、それはともかくとして、ルックマン教授の理論を理解するためのキー・ワードの一つは、人間経験における「超越」という概念である。

邦訳もある彼の啓蒙書『見えない宗教』（一九六七年）以来の立論の拠点にも、人間が本来宗教的である契機に「超越」経験を据えているし、チュービンゲンでの発題のテーマも「社会における超越の再構成」であった。そして今回の講演の骨子にも、人間主観の「超越」経験の指摘が重要な論拠になっているからである。

いささか我流を交えて解説すると、人間の意識全般に共通するのは、物事がそれ自体完全に孤立した形では経験されないということである。あらゆる経験は、つねに

他の諸経験とリンクされ、経験のある部分はかならずその残りの部分を指示している。

したがってまた、直接的に得られた経験内容が、実は直接には得られない経験とリンクされ、それを指示することも多い。身近な例をあげれば、目前にある茶碗の前面はごく自然にその見えない裏面をリアルに想念させてもいるのだ。トポロジカルに言えば、〈模様〉と〈地〉の関係である。かく日常茶飯事のなかにもあるように、いま経験している物事を通して、いま経験していない事柄を間接的にせよリアルに想念する仕組みこそが、直接経験の域を超えた人間なればこその「超越」経験なのである。

ルックマン教授は、彼の亡師アルフレッド・シュッツの理論に倣って、この超越を三つのレベルに分ける。日常のさまざまな生活経験に生じる〝小さな〟超越と、典型的には自他の会話で交互に生じる社会レベルの〝中くらい〟の超越、それに非日常の場に起こる〝大きな〟超越とである。

前二者のごく日常に起きる超越に比べて、後の異常な超越は、夢、ドラマ、瞑想や何らかのエクスタシー経験に生じるもので、その強烈な経験は日常世界を脅かし、時にこれを根底から改変せしめることもある。教授は、この超常的な経験に顕現する強烈な実在が宗教の核となって、それが社会構造の内にどう再構成され、どう組み込まれるのかが、宗教の社会学的な捉え方だという。そこで今回の論題は、さまざまな社会構造との関係における宗教のあり方であり、現代西欧の社会に特有の世俗化と近代化からもたらされた宗教の〝私化〟(privatization)という指摘になるわけだが、この大きな問題を扱うのは別の機会としよう。

ここで考えておきたいのは、人間における「超越」の問題である。ヒトが人間（社会的存在）である根本の契機に、意識経験に内発する「超越」を見据えることには私も異論はない。

むしろ人間経験にこの「超越」の契機があればこそ、宗教や芸術、言語ばかりか、社会・経済などあらゆる人間文化が発生しえたとさえ考えている。

ただ、そこで問題なのは、この「超越」がもたらす宗教的課題である。私は、ヒトが人間となることにおいて即宗教的であらねばならないのは、ただ「超越」経験にもとづくからではなく、この「超越」によって人間に課せられた〈生命〉の自己矛盾ではないか、とかねてから思っている。

つまり、人間が「超越」経験によって自他の〈生命〉なるものを自覚してきたのは、〈生〉に内在する〈死〉と〈死後〉の超越的なリアリティーにほかならない。生きるとは、やがて死ぬことであり、生き残るのは他を殺す〈食う〉ことだという〈生命〉の内部矛盾をどう解決するかは、宗教に永遠の課題ではあるまいか。

しかし、ここで思いおこすのは、昭和六十一年末に開催された天理国際シンポジュウムで拝聴したハーヴァード大学名誉教授ウイルフレッド・スミス氏の講演である。氏は、きたるべき二十一世紀がはたして宗教的か世俗的かを展望して、そのどちらでもなく、ただ人間が人間なればこその「超越」に敏感でありつづけることを願うのみ、とその話を結んで、聴衆に深い感動を与えられた。

かつて道元も、生死のほかに仏を求める道はない、と喝破している。科学技術文明が急速に進んで人間そのものが問われている今日、宗教には、宗教である以前に人間への深い省察が肝要ではあるまいか。

（そのだ　みのる・国学院大学教授）